

「あまみエフエム ディ！ウェイヴ」放送原稿〈2月21日（金）放送分〉

テーマ「奄美群島12市町村の伝説・昔話」

あまみエフエム ディ！ウェイヴをお聞きの皆様、おはようございます。鹿児島県立奄美図書館です。今日は、毎月第3金曜日にお届けしている、奄美の伝説や昔話などを紹介する「奄美群島12市町村」シリーズの第11回、与論町の昔話「海^{いるか}豚になった甥の話」です。

叔父^{おじ}と甥^{おい}は、風^{なぎ}になると、いつも二人で小舟を漕ぎ、魚を獲りに出かけました。魚の獲れる日もあるし、獲れない日もありました。

叔父は、魚の獲れない日は、「今日は魚がつかない日のようだ。魚がつかない日は、決まって一匹も釣れないと言われて^{いる}。海^{うみ}の神様がおっしゃるとおり、さあ今日はこれで帰ることにしよう。」というのが口癖^{くちくせ}でした。

甥はそんなとき、「海^{うみ}の神様の日なんて、そんなことがあるもんか。釣り場を替えることにしよう。」こう言い張って、叔父の言葉に逆らうのでした。

こんな押し問答^{もんどう}をしながら、風のない日は二人で毎日魚を獲りに出かけるのでした。

ある日、叔父と甥は、かねての釣り場に出かけていきました。

その日は、魚がつく日で、二人は夢中になって釣り上げていました。

ところが、東の方に黒い雲が立つかと思うと、やがて風が動き出してきました。そして雲が西の空まで広がり、海^{うみ}を覆い尽くしてしまいました。波^{なみ}がざわざわと舟端^{ふなばた}を叩き始めました。

叔父が、「海^{うみ}が時化^{しけ}してきたぞ、櫂^{かい}を握れ、帰るんだ、漕ぐんだ。」と甥に言い付けるのですが、甥は叔父の言うことを聞こうとしません。

叔父は堪^{たま}らなくな^{って}、「海^{うみ}の神様が、怒^{いか}っておられる。板子一枚下は地獄^{じごく}じゃぞ。」と言って怒鳴^{どな}りつけました。甥はそれでも聞^きこうとしません。こんなふう^にに言い争^いっているうちに、海^{うみ}はいよいよ荒れ狂い、小舟は覆^{くつがえ}らんばかりになりました。

そのとき、小山のような波が、白い歯を剥き出しにして、小舟^{おそ}に襲^{おそ}いかかろうとしました。叔父はすかさず、「舟端^{ふなばた}を握れー！」と叫びましたが、間に合いませんでした。甥は握っていた櫂^{かい}で自分の目を突いてしまい、海^{うみ}に振り落とされてしまいました。

「叔父さーん。」と呼ぶ声を、波^{なみ}の間からたった一声^{ひとこえ}聞いただけでした。

叔父は甥の名を叫びながら、呆然^{ぼうぜん}と波風^{なみかぜ}に身を任せていました。

ところが、しばらくすると、海^{うみ}の上は嘘^{うそ}のように穏やかになりました。叔父は甥の名前を叫ぶのでしたが、とうとう甥は答えませんでした。

叔父は、それからというもの、風さえすれば一人で小舟を漕いで、かねての釣り場に出かけていきました。そしていつものように、甥の名前を呼びました。

夢でもいいから、一声聞きたい。叔父は目をつぶるのですが、甥は応えてくれませ

んでした。

魚は獲れる日もあれば、獲れない日もありました。

ある日のことです。その日は、大変魚がつく日でした。叔父は夢中になって魚を釣りました。ところが、東の空に雲が立っただと思うと、みるみるうちに西の空に広がり、海の上を真っ黒な雲が覆い尽くしてしまいました。やがて風が吹き始め、波が舟端にざわめきました。たちまち荒波になり、叔父の小舟は波に飲み込まれそうになりました。

しかし、叔父は甥の名前を叫びながら、帰ろうとしませんでした。すると、荒れ狂う波の間から、「叔父さーん。」と呼ぶ声がしたかと思うと、小舟の舟端を叩くものがありました。

叔父は狂ったように、甥の名前を叫びました。そして、「もう一声、聞かせてくれ一。」と叫びました。すると、「叔父さーん。」という声がして、何かが舟端を叩きました。けれど、それだけでした。

しかし、どうしたことか、叔父の小舟の周りは、油を流したように、波が穏やかになり、風も止んでしまいました。そのとき、一頭の子豚が小舟の周りを泳いでいました。その子豚は、片目を痛めていました。叔父は甥の名前を呼びましたが、再び甥の声を聞くことはできませんでした。

遠く島を離れて釣りに出ると、時おり、鯨くじらや子豚や鮫さめなどが、小舟に近寄ってきて、舟を転覆てんぷくさせることがあるそうです。そんなときは、舟端を叩いて、「ふりやわあ ふぢやじやまふに（これは わたしの 叔父さんの 舟）」と唱えると、鯨も子豚も鮫も人間に邪魔をしなくなるそうです。

さて、今回のお話はいかがでしたか。荒波に飲み込まれそうな小舟の上で、叔父と甥が必死に堪える場面は、とても臨場感があり、海に生きる男たちの姿がよく表れていました。

また、もう一度甥の声を聞きたいと、再び同じように荒れる海で、必死に甥の名前を叫ぶ叔父の姿も印象的でした。もしかすると海の神様が、そのような叔父の姿を見て、その願いを聞き入れたのかもしれませんが。

さて、このように奄美図書館には、面白いお話を紹介した本がたくさんあります。ぜひ図書館にいらして、いろいろな本を手にとってほしいと思います。職員一同、皆様のご来館を心よりお待ちしております。

以上、鹿児島県立奄美図書館でした。